

- 1 課題名 養殖衛生管理体制整備（海面）
- 2 区分 国交付金（国費：県費＝1：1）
- 3 期間 平成15～21年度
- 4 担当 養殖栽培部（堅田昌英）
- 5 目的 養殖魚介類の防疫指導を適切に行うことで疾病のまん延防止を図り、安心・安全な生産・供給体制を確立する。

6 成果の要約

(1) 成果の概要

養殖場の巡回指導 県内を北部（湯浅湾・由良湾）、中部（田辺湾）、南部（串本浅海漁場・大島・須江養殖漁場）および東部（勝浦湾・浦神湾）の4海域に分け、毎月1回ずつ防疫パトロールを実施した。

水産用医薬品残留検査 マダイ養殖における水産用医薬品適正使用指導に資するため、平成20年7月4日・5日に養殖マダイを田辺湾（1歳魚、平均魚体重1.0kg）および串本浅海漁場（2歳魚、魚体重1.7kg）から5尾ずつサンプリングし、筋肉中の塩酸オキシテトラサイクリンの残留検査を行ったが、いずれも検出されなかった。

魚病検査

1) 持ち込み病魚の検査 検査件数は11魚種92件であった。

魚種別ではマダイが36件で最も多く、次いでシマアジ17件、イシダイ12件、ヒラメ9件で、これら4魚種で全体の約80%を占めていた。月別に見ると6～10月の高水温期に多く、毎月7～18件の検査を行った。

2) 魚種別魚病発生状況 ブリでは7月に連鎖球菌症、8月にイリドウイルス病がそれぞれ1件ずつ発生した。

マダイでは当歳魚および1歳魚でイリドウイルス病が6～11月にかけて、単独およびエピテリオシスチス症や寄生虫病との合併症で16件発生した。細菌病は単独と寄生虫病との合併症で13件見られ、そのうち、エピテリオシスチス症10件、滑走細菌症3件、エドワジエラ症2件、ビブリオ病1件であった。寄生虫病は発生件数23件で、ピバギナ、ラメロディスカス、トリコジナ、クピナガ鉤頭虫、ベネデニアおよびネオベネデニアの寄生が見られ、近年多様化している。特に、春から初夏にかけて出荷サイズ（体重1.5～2kg）の2～3歳魚のマダイでベネデニア症（*Benedenia sekii* 感染症）が多発し、体表患部のスレによる商品価値の低下で大きな損害が出た。

ヒラメではイリドウイルス病が6～9月にかけて単独および合併症で4件発生した。細菌病は単独および合併症で連鎖球菌症が3件発生し、寄生虫病はイクチオボド症が5月に1件発生した。

シマアジではイリドウイルス病が6～11月にかけて単独および合併症で6件、ウイルス性神経壊死症が12～翌年3月にかけて5件発生した。また、9月には連鎖球菌症が、4月と12月にはビブリオ病が発生した。

イシダイでは当歳魚および1歳魚でイリドウイルス病が8～11月にかけて単独および合併症で7件発生し、多くの被害を出した。また、ベネデニア症が単独および合併症で8件見られた。

マアジで6月に連鎖球菌症が1件発生した他、クエ、クロマグロおよびイサキではイリドウイルス病が単独および合併症で発生した。また、中間育成中のクロアワビ（体重6.9～21.5g）で3月にビブリオ病が発生し、多くの死亡が見られた。

3) 健康診断 診断件数は10魚種59件であった。このうち、水産用ワクチン接種に関係した健康診断は3魚種4件であった。

魚種別に見ると、マダイが中間魚と稚魚を合わせて26件で最も多く、他の魚種は14件以下であった。マダイ稚魚ではエピテリオシスチス、ピバギナ、ラメロディスカスおよびトリコジナの寄生が確認され、中間魚ではこれらの他に、クピナガ鉤頭虫の寄生が見られた。また、nested PCRでシマアジ産卵親魚卵巢中のベータノダウイルス保有検査を6月と10・11月に実施したところ、いずれも陽性であった。

7 成果の取り扱い

(1) 成果の普及

防疫パトロールで魚病対策指導および水産用医薬品の適正使用指導を行った。

(2) 成果の発表

平成20年度瀬戸内海・四国ブロック魚病検討会、平成20年度県内養殖衛生対策会議、平成20年度水産技術成果発表会